

を定位するかという問題以上に、保守や革新なるものの明確なイメージ自体が存在するかどうか疑わしい。

一般演習授業での学生たちの反応はおよそ次のようであった。

保守；安定、中味がある、現状維持、冷静、堅固な城、強力……。

革新；変化、口先だけ、単なるスローガン、過激、烏合の衆、無力……。

この結果を彼らの保守化と解釈することも可能である。しかし、彼らが歴史の変化に理想もユートピアも見えていないとすれば、保守化というよりは非革新化と名づけた方がよいのではないか。彼らの回答は革新に対峙するものとして保守イデオロギーへの傾斜を示すものではない。むしろ、理念や概念を排除した政治理解であり、日常感覚で政治像を表現している。したがって、日常生活に政治の介入を感知しない多くの学生たちはこの種の質問に、「わからない」、あるいは「無色」と答える。

それにしても、理念を媒介にしない政治理解はきわめてリアルであり、感覚的である。そして、政治の劇的側面を皮膚感覚で感知する。ある学生はこの質問に次のように答えている。「保守は論理よりも感情のぶうかりあい。でもしよせんこんなものかもしれない。革新はあげ足とり。革新は青春しないだろうなあ。」

これらの例はあまり多くはないかも知れない。また、香川大学は都市部の大学に比し、エイリアンたちも現在のところ少数派にとどまっているだろう。しかし、時代背景を考慮すれば、エイリアンたちが今後ますます増殖すると考えねばなるまい。もはやエイリアンの時代になりつつあると観念すべきであろう。

ところで、彼らが多数派になった時、われわれを見て彼らはどう思うのだろうか。きっと、こう言うに違いない。

「あの先生まるでエイリアンだな。」因果応報、時代は巡る。

期待される人物像

戦後もしばらくの間は、二宮金次郎の銅像が小学校の校庭に見られたものだが最近ではほとんどその姿を見かけなくなった。しかし二宮金次郎に代る銅像はまだ現われていないようだ。戦後の日本は自由と平和と民主主義の世の中に変わって価値観が多様化し、期待される人物像もまた多様化したため「画一的」に提示することが難しいか

小林 立

らかもしれない。それでも人物像の基本的な型としては「良い子」「悪い子」「普通の子」「おまけの子」という四つの区分が既に確立しているように思われる。この区分は「世のため人のため」という大それた基準によるものではないかもしれないが「人に迷惑をかけない」といった控え目な基準による区別であると言えそうだ。しかし、こ

の区別は人々の生活に安全を保障するためにも日常的に必要な標識であり、また実際に役に立っているものに違いない。

人は大人として生まれて来るわけでもないし、赤子のままでいるわけでもない。孔子は晩年、“われ十有五にして学に志し、三十にして立ち、四十にして惑わず、五十にして天命を知る、六十にして耳順い、七十にして心の欲する所に従って矩を踰えず。”と述べたという。それ故、孔子はおよそ十年毎に心境に変化があったことを自ら認めていることがわかるのである。二千五百年前の中国において七十過ぎまで生きた孔子は長寿と違って間違いないが、もし八十、九十、さらに百まで生きていたら、孔子は如何なる感懐を述べたことだろうか。昨年の九月二十二日は、孔子生誕二千五百三十五周年にあたり、生誕地の山東省曲阜では孔子像の復元を祝う行事が盛大に行われたという。“至聖先師”として崇拜される孔子ですら、というより孔子だからこそと云うべきかもしれないが、世の激動期には、先ず以って孔子は批判、攻撃の槍玉にあげられ、孔子像も破壊されるという憂目に会っていることが窺われるのである。

昔は“人生五十年”と云って十代前半で元服し一人前に扱われたというが、“人生八十年”といわれる今日では満二十歳をもって成人式を迎える。しかしまだ勉学中の身で親のスネを齧っている場合も多いから年令だけで割り切れないに違いないが平均的年令としては無難な決まりと云うべきかもしれない。だが主体的条件がどうあれ人は成人式を境に法的処遇が一変する以上、満二十歳の意味と未成年の時期がもつ重要性とはどんなに強調してもしすぎるということはないのではあるまいか。“修身齊家治國

平天下”というから規範的な知識と広い視野を学んでおくことが成人後の人生にとって必要不可欠なものであることは間違いないだろうし、その判断力や行動に雲泥の差をもたらす要因の一つに数えうると言っても過言ではないかもしれない。戦後の日本においては修身とか道徳とかいった言葉がすべて消え失せたことが一時期あったように思うが、“終戦”は日本の“良い子”を一朝にして“悪い子”に変えてしまったから、躰とか道徳とかの重要性について叫んでも反発と壘盤を買うのがおちであったに相違ない。それにつけても、あの当時、“外地”の残留孤児は言うまでもないが“内地”において戦災孤児や浮浪児になった子どもたちはその未成年期をどのように過ごしたことだろうか。

“梅樞は双葉より芳し”とか“三子の魂百まで”とかいわれる。“良い子”“悪い子”“普通の子”“おまけの子”という四区分にも安定性と永続性が期待される所以であり、それでこそ日常的にも役に立つ標識と言えるに違いない。就中、“良い子”は絶対的に“良い子”であり、“悪い子”は絶対的に“悪い子”であるという熱い期待が寄せられて不思議ではあるまい。“良い子”と“悪い子”は一挙一動、片言隻句が注目の的になることは間違いないが、同じく期待されるとはいえ“良い子”は信頼と尊敬の目でその言動を受けとめられるだろうが、“悪い子”は自分で“種”を播いた以上は当然だが、“かい人21面相”の“名言”の通り、“わるがわるいことをやめおたらすじとおらへん”という絶対的不信と疑心暗鬼の目で見られるという差異はあるに違いない。

ところで他方また“善に強いは悪にも強い”とか“悪に強いは善にも強い”とかい

われる。従って“良い子”が“悪い子”に転化し、“悪い子”が“良い子”に変身する以外に、“普通の子”が“良い子”に変わった、逆に“悪い子”になったり、さらには“おまけの子”が“普通の子”や“良い子”に変わったりすることも全然有り得ないことではないかもしれない。それはさておき、

人は死後、閻魔大王により生前の言行を詳しく取り調べられ、“地獄”と“極楽”のいずれかに行先を裁定されるという。従って、現世における四つの期待される人物像はまだまだも人間的であり弾力性に富んだ区分であるように思われるのである。

講道館柔道、タイを往く——その5

村田直樹

前号迄のあらすじ。

（狐につつまれた様だけど、兎に角、面白くなってきたぞ。）

その肌浅黒き、まさに食べ頃お色気権化のあのアヤさんが、プールサイドの白い揺り椅子に腰掛けて、長い髪を梳かしながら、次の様に言ったのだ。

「アチャーンはいつ日本へ帰るの。アタシをその時連れてって一緒に。ねっ。」

「此処では話したくないの。あっちへ行きたいわ。」

その指差す方をずっと追えば、私の部屋を指していた。

「OK。レッツゴー。」

勿論これは、私の返事——。

首を傾け、先刻より肩の前に垂らして梳いていたタイ人特有を思わせる黒い髪から手を離し、彼女は椅子から立ち上がる。白い揺り椅子、微かに揺れて。

（これから俺の部屋へ行く。一体どうなっているんだろう。どうなっていたってどうでもいいぞ。彼女は部屋に向かっている。）

彼女は少し前に行く。彼女は私の斜め前。まあるい肩が見えている。まぶしい裸の両肩のツヤツヤ茶色に光る肌。その両肩の間には豊かで黒い長き髪。こういうものが、後からついて行く私の眼に映るのだ。さりげなく装いながらも、私は息を詰める思いであった。

あゝ。今こそ真の国際交流。日一タイ契るの瞬間か。これぞ仏教に於ける因縁のダイナミズム。私は最早、長政で、前行く彼女は月光姫か——。なーんていう事、思ったかな。

でも、何でこの仕儀、相成った？

私は唯々プールサイドにやって来て、話し掛けただけなのに。あとは事の流れに身を任せ、で、こういうのを無意識と言うのだろうか。